



厚生経済学から生活経済学へ : 新しい経済科学をめざして (夏目隆教授記念号)

酒井, 泰弘

(Citation)

国民経済雑誌, 172(3):29-72

(Issue Date)

1995-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00175998>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00175998>



厚生経済学から生活経済学へ

——新しい経済科学をめざして——

酒 井 泰 弘*

目 次

- I. はじめに——『春宵十話』のころ
- II. アダム・スミスと政治経済学
 - II-1. 富の研究——主要な目的
 - II-2. 価格決定の研究——副次的目的
- III. ワルラスとマーシャル
 - III-1. ワルラスの純粋経済学
 - III-2. マーシャルと人間の研究
- IV. 厚生経済学の展開と停滞
 - IV-1. ビグーの厚生経済学
 - IV-2. 旧厚生経済学から新厚生経済学へ
 - IV-3. 一般均衡理論との関係
- V. 現代の経済学
 - V-1. リスクと情報の経済学
 - V-2. ゲーム理論の新展開
- VI. 生活経済学の目的と意義
 - VI-1. 厚生経済学から生活経済学へ
 - VI-2. 生活経済学の課題——7つのポイント
- VII. おわりに——新しい経済科学への道

I はじめに——『春宵十話』のころ

私が大学生だったころ、日本はまだまだ貧しく、人々のころも不安定であ

* 本稿が夏目隆教授御退官記念号に掲載されますことは、大変光栄に存じます。新天地での夏目先生の御活躍を心より祈念しております。

本稿の成るについては、文部省科学研究費（課題番号07630003）および簡易保険文化財団より、財政援助を一部受けています。また、原司郎・藤田晴・千田純一・上田昭三の諸先生をはじめ、生活経済学会体系化委員会委員の方々より貴重なコメントを得ることができました。記して感謝したいと思います。

った。日米安全保障条約の改定をめぐる、国論ははっきりと二分され、各都市の道路はデモの怒声とビラの吹雪のなかで騒然となっていた。大学の授業は臨時休講が多く、大教室は即席の学生大会の場となり、憤激した大会決議文がヤジと怒号のなかで採択された。曰く、「日米不平等条約の改悪阻止!」、「軍事基地より平和な市民生活を!」、「学内の民主化と学生生活の改善を図れ!」。当時の学生たちの多くはいつも腹を空かせ、むしうに腹を立てていたものだった。

そのような悶々とした学生時代、私の飢えたところを慰めてくれる警世の随筆があった。それは、世界に輝く数学者たる岡潔博士による新聞連載の随筆で、後に単行本に納められた『春宵十話』であった。次のような文章を読んだとき、私は心臓がほとんど止まるような衝撃を受けた。

「ともかく私は数学専攻に踏み切るのには臆病だったが、外国の文化を恐ろしいと思ったことはなかった。……この点、一般の日本人は逆で、数学と言うものには恐れを知らなさすぎるくせに、外国文化を恐れすぎる。この誤りをはっきりいっておきたい」¹

数学を恐れるが外国文化を恐れない、と言いきれる人間がそこにいる。安保反対闘争も一皮剥けば、外国文化を恐れすぎていることの「裏返し」ではなかろうか。ともあれ、数学を恐れすぎず、外国文化を恐れすぎず、ごく素直な態度でもって有意義な学生生活を送ろうではないか。私がこういう気持ちになれたのも、岡先生の鋭い警鐘のお陰であった。私は『春宵十話』に触発されて、街頭デモ以外の時間のほとんどを読書に捧げることに決心した。経済の古典は言うまでもなく、文学・哲学・科学関係の文庫本や新書判をむさぼるように読

1 岡潔(1971), 25 ページ。自社連立政権・神戸大震災・超円高・サリン事件など、現代の日本は異変が続き、「組織疲労」が至るところに出ている。今から25年も前に、「日本には、大切なものが欠けている、忘れられているものがある」と鋭い警告をひとり発しておられた岡先生の先見の明には、頭を下げざるを得ない。わが経済学の世界にも、組織疲労がたまっていないだろうか。すでに、J.ロビンソン(1971), J.R.ヒックス(1974), 森嶋通夫(1994), 宇澤弘文(1989, 95)などの碩学が警鐘を発しておられるが、圧倒的な大音響にまで至っていないのは残念である。

んだ。そして、「数学を恐れすぎず、外国文化も恐れすぎない経済学」とはどのようなものだろうか、と自問自答したものだった。

私が上のようなこころの状態でいたとき、毎週のように会合を開いては、文字通り口角泡を飛ばすような勢いのある研究グループが1つあった。それが、今は亡き北野熊喜男先生をリーダーとする「厚生経済学の神戸グループ」であった。今回ご退官された夏目隆先生は、故人の黒岩洋昌先生ほかの方々とともに、良き「兄貴格」のサブリーダーであった。研究会は時には5時間にも6時間にも及んだが、そこにはいつも、「厚生経済学こそ、暖かい心と冷静な頭を持った、学問中の学問である」というような気迫と情熱が存在していた²。

あれから30年。物理的な時間の流れの早さに驚くが、それよりも学問的な流行の流れの早さのほうにびっくりする。その後の経済学、特にミクロ経済学の関心は、一般均衡理論からリスクと情報の経済学へ、さらにはゲーム理論の展開へと、目まぐるしく変わっていった。なるほど、厚生経済学はすでに1つの確立された分野として、これら後代の経済学の中にそれなりに内臓されている。だが、私の見るところ、それはあくまで「内臓」されているにすぎず、外部への全体的な「存在感」が以前ほどではないように感じられてならない。これはまことに残念な風潮である。

本稿は、微力ながら、このような現代打開のための1試論である。狙いは、厚生経済学の復権であるが、ただ単なる「復権」ではもの足りないだろう。そこで、人々の「生活経済」という一層広い視野から、厚生経済学がもともと意図していたものを現代に生かそうと試みる。伝統的な厚生経済学においては、効用極大化を図る消費者が主役の座を占めていた。これに対して、新しい生活経済学では、もっと広い意味での「ゆたかさ」を求める「生活者」が中心的役割を果たす。それでは、「ゆたかさ」とは何であり、「生活者」とはどういう人

2 「厚生経済学の神戸学派」の熱気をよく伝えるものは、黒岩洋昌先生の遺書(1970)である。この名著の「はしがき」は、同先生の逝去3日前(正確には1967年5月15日午後9時)に病院のベッドの上で書かれた。文字通り死を賭けて、厚生経済学の研究に没頭されていたわけである。

間なのであろうか。実は、これを手順を追って徐々に明らかにしていこうとするのが、本稿の目的なのである。断っておくが、現段階において、筆者の考え方が100%固まっているわけではない。諸賢からのご批判を得て、一層堅固なものにしていきたいと思う。もし本稿によって「厚生経済学から生活経済学へ」という方向への理解が進むならば、筆者として大変満足なのである。

本稿の内容について以下に述べる。次の第Ⅱ節では、学史的興味からアダム・スミスの政治経済学の意義と内容を検討する。第Ⅲ節では価格決定論を主力とするワルラスの純粋経済学の意図を明らかにし、第Ⅳ節ではマーシャルと人間の研究について詳しく吟味する。第Ⅴ節では、ピグーに始まる旧厚生経済学の役割と問題点を解明し、パレート最適に基礎を置く新厚生経済学ならびに一般均衡理論との関係について言及する。そのさい、パレート最適の概念の限界と止揚とが議論の中心となろう。第Ⅵ節においては、安全とゆたかさを望む生活者の立場から、狭い厚生経済学の範囲を越えた生活経済学の樹立の可能性について言及する。そして、結論と今後の研究の方向が、最後の第Ⅶ節において述べられる。

Ⅱ アダム・スミスと政治経済学

「温故知新」という言葉がある。昔のことを研究して、新しい道理を発見する、という意味だ。伝統的な経済学の流れのなかで、新しい生活経済学の位置づけを行おうとする際、この金言の重みは大きい。だから、われわれはまず、「経済学の父」と尊称されるアダム・スミス（1723—90）から話を始めよう。

Ⅱ-1 富の研究——主要な目的

アダム・スミスにとって、経済学の目的とは何であったのだろうか。有名な古典『国富論』（1776）を開けると、第1編のタイトルは「労働の生産力の改善（improvement in the productive powers of labour）の原因について、また、生産物が人々のさまざまな階級の間に自然に分配される秩序について」であり、その第1章は「分業について」である。この第1編において、経済学の意義や

目的が言及されていないのは面白い。そんな面倒臭い話しは後回しにして、産業に支えられる生産力の発展の姿と、生産物の分配の過程を最初に調べようというのが、アダム・スミスの執筆方針であった。

だが、アダム・スミスが経済学の目的を論じ忘れたわけではないのだ。実のところ、はるか第4編「政治経済学の諸体系について」において、次のような明確な記述がある。

「政治経済学 (political economy) は政治家または立法者の科学の1部門と考えられるが、それは2つの別個の目的を立てている。その第1は、人々に豊富な収入または生活資料 (revenue or subsistence) を供給すること、つまり一層適切に言えば、人々が自分のためにこのような収入または生活資料を自分で調達しうるようにすることである。そして第2は、国家すなわち共同社会 (state or commonwealth) に、公共サービスを遂行するのに十分な収入を供給することである。経済学は、人々と主権者をともに富ますこと (to enrich both the people and the sovereign) を意図する」(訳書、第3分冊、5ページ³)

アダム・スミスにとって一番関心があったのは、人々に生活資料を提供することを通じて、人々の生活を直接的に富ますことであった。そして次にくるのは、社会全体に必要な公共サービスを提供することを通じて、人々の生活を間接的に富ますことであった。

言うまでもなく、『国富論』は略称であって、正式のタイトルは、『諸国民の富の性質および諸原因に関する研究』(AN INQUIRY INTO THE NATURE AND CAUSES OF THE WEALTH OF NATIONS) である。だから、経済学は「富」とは何かを解明し、国民の生活を豊かにすることに深く関係する。問題は、この「富」の概念をめぐって、経済学者の間で意見の一致が得られないことである。

3 これや以下の引用文は、スミス著、大内兵衛・松川七郎訳(1965)にもとづいている。ただし、もとの訳文にはやや硬く思われる個所があり、筆者のほうで自由に筆を入れさせていただいた。ご海容をお願いしたい。

アダム・スミスの時代においても、富の概念規定をめぐる、いろいろな見解があった。その中で最も支配的なものは、「富とは貨幣あるいは金銀にほかならない」という見解であった。スミスによれば、このような「通俗的な見解」を学問的に体系化したものが「重商主義体系」(merchantile system)であった。その結果、当時のヨーロッパの各国民は、自国に金銀を蓄積するあらゆる可能な方法を採用してきた。その第1の方法は、高率な関税や輸入禁止など、外国からの輸入に対してさまざまな制限措置をとることである。第2の方法は、輸出奨励金や、再輸出の際の戻り税など、自国からの輸出に対していろいろな奨励策をとることである。第1と第2の方法が併用されれば、自国の貿易差額は確かに増大し、金銀が自国にどしどし蓄積していく。

アダム・スミスが『国富論』を書いた主要動機の1つは、当時の中心思想であった重商主義体系に異論を唱えることであった。事実、「貿易差額についての全学説ほど馬鹿げたものはない」として、これらの学説のひとつひとつについて、詳細な反論を展開している。要するに、重商主義政策によって利益を得るのは一部の商人や製造業者だけにすぎず、一般大衆は不利益を被り、自国の富にも外国の富にも不利に作用するのだ、と言う。

スミスによれば、「利益または利得という場合、それは金銀の量の増加ではなく、その国の土地および労働の年々の生産物の交換価値 (the exchangeable value of the annual produce of the land and labour of the country) の増加すなわちその住民の年々の収入 (the annual revenue of its inhabitants) の増加」を意味する。現代風に解釈すれば、国民所得ないしGNPが増加すれば、国富は増加するであろう。隣国が富めば、貿易を通じて、自国も富むはずである。例えば、「両国の現実の利益を考慮するならば、フランスとの商業は他のどの国とのそれよりも大ブリテンにとって有利だろうし、また同一の理由によって、大ブリテンとの商業はフランスにとってそうであろう」(訳書、133ページ)。

スミスが主張するには、「優遇や制限を行う全体系」(all systems either of

preference or of restraint) は、「実質上の富および偉大さ」(real wealth and greatness) に向かう社会の進歩を加速させるところか減速させ、この社会の土地および労働の年々の生産物の実質的な価値を増加させるところか減少させる」(訳書、502ページ)。上述した重商主義体系は、このような体系の1つである。また、「農業の諸体系」(agricultural systems) も、同様な体系である。というのは、「農業の促進のためにそれを他のすべての職業より優先させ、製造業や外国貿易に諸制限を課するような諸体系は、それが設定する目的そのものに反する作用を及ぼし、それが促進しようと企画している部類の産業そのものを間接的に阻害する。このかぎりにおいて、この体系は、恐らくは重商主義体系に比べてさえ、一層首尾一貫しない」(訳書、501ページ)。

これに対して、スミスが唱導する体系は、「自然的自由という単純明白な体系」(the obvious and simple system of natural liberty) である。この新しい体系においては、「あらゆる人は、正義の法律を犯さないかぎり、各人各様の方法で自分の利益を追求し、自分の勤労や資本を他のどの人、または他のどの身分の人々の勤労や資本と競争するように、完全に自由に放任される」(訳書、502ページ)。

上に述べたように、スミスは2つの体系——優遇や制限の体系と自由放任の体系——を比較する。そして、もし国民の富の大きさが金銀や農産物の量ではなく、国民生産物の実質価値で測られるならば、優遇や制限の体系よりも、それらを排除した自由放任の体系のほうがベターであると結論づけるのである。

II-2 価格決定の研究——副次的目的

以上に見たように、アダム・スミスにとって経済学的主要目的とは富の研究であり、人々に生活資料を提供し、公共サービスを提供することを通じて生活状態を改善するための研究である。というのは、それが経済成長と社会進歩に深く関係すると信じたからである。

ところが、古典が古典たる所以は、著作物のいわば「純度」が100%でなく、「不純物」がここあそこに散りばめられていることだ。実際、論旨が明解すぎ

て別の解釈の余地が全くない書物ならば、その素直さのあまり、時代の変化についていけず、早晩に忘れ去られる運命にあるだろう。逆に、論旨がそれほど明白でなくとも非常に興味深く、適度に神秘さと曖昧さがあれば、社会に変化が起ころうとも、別解釈の工夫で後代まで長く生き延びることができるだろう。この意味において、アダム・スミスの『国富論』は古典中の古典である。

『国富論』をよく読んでみると、スミスは経済学の目的として副次的なものを考えていたことが分かる。このような副次的な目的とは、ものの交換価値の研究であり、市場がいかに効率的に運行するかを示すことであった。例の「神の見えざる手」(invisible hand)という言葉は、これとの関連で考える必要がある。

それでは、スミスの政治経済学と神の見えざる手との間には、どのような関係が成り立つのであろうか。そのために、次のような有名な文章を引用しよう。

「実際のところ、あらゆる個人は通例、公共の利益を促進しようと意図していないし、自分がそれをどれだけ促進しているかを知らない。外国産業よりも国内産業の支持を選好することによって、各個人は自分自身の安全だけを意図する。また、各個人は生産物が最大の価値を持ちうるような仕方で産業を方向づけることによって、自分自身の利益だけを意図している。そして、この場合でも他の多くの場合と同様に、神の見えざる手に導かれ、自分が全然意図しなかった目的を促進する。各個人が目的を全然意図していなかったことは、社会にとってその分だけ悪いとは必ずしもいえない。各個人は、自分自身の利益を追求することによって、社会の利益を実際に促進しようと意図する場合よりも、それを一層有効に促進する場合がしばしばあるのだ」(訳書、56ページ)。

上の文章が第4編にあることを注意しておく。だから、この文章が書かれた真の意図は、重商主義の保護・制限策の撤廃を図り、各人をして自由に自らの利益を追求させれば、人々の収入は増大し、国の富が増加することを説いたところにある。「国全体の利益の増進を図るためには、国が干渉せずに、むしろ

個人の利己的動機に任せよ」という主張は、一見パラドキシカルで、当時の多くの人々をびっくりさせたにちがいない。そこで、アダム・スミスは、このパラドックスを解く鍵として、「神の見えざる手」というキーワードを創案したのだらうと思う。一見常識と違う主張をして人を驚かせ、さらに相手の予想もできないであろう用語を用いて人を2度びっくりさせる方法は、雄弁術で御馴染みのテクニックなのである。このキーワードが重商主義や交換価値のように頻度の高い「重い術語」でなく、修辞上の「軽い用語」であったことは、それが分厚い『国富論』の中で1度しか出てこないことから分かる。そして、その1度こそが上の文章にほかならない。

だが、魅惑的な言葉が最初の当惑を克服して、人々の耳に心よく響くようになると、それは本来の意味を離れて一人歩きするようになる。実際、現代の主流派経済学によると、「神の見えざる手」が市場経済の「最適性」を示す言葉であるかのように解釈されることが多い。例として、一般均衡理論の優れたテクニストであるクワークとサポースニクの『一般均衡理論と厚生経済学』のページをめくると、次のような言葉が出てくる。

「財やサービスの生産・分配を組織する他の方法と比較して、競争メカニズムが一定の「望ましい」性質を持つ、という考え方は、古典派・新古典派の著作のたいていのものに見られる」（訳書、124ページ）。

そして、このような「望ましい」性質の代表選手が、かの有名な「パレート最適」の概念なのである。詳しくは、後に一般均衡理論を論じる際に述べるが、「すべての競争均衡はパレート最適であり、その逆も真である」という命題が、アダム・スミスの「神の見えざる手」の存在証明であるかのように説かれることが少なくない。⁴

私見によると、「神の見えざる手」の概念は、市場メカニズムの「最適性」

4 例えば、黒岩洋昌（1970）には、「完全競争のもとで各消費者がそれぞれ効用を極大にする場合には、価格システムという〈見えざる手〉の導きによって、おのずから消費財の最適配分が達成される」（74ページ）という文章が見られる。だが、見えざる手とパレート最適とは本来別々の概念のはずである。

(optimality) よりも、その「運行可能性」(workability) のほうに関係している。国家からの保護・奨励策を廃止し、各人による私利追求を自由に行わせれば、各財・サービスの需要と供給のバランスが市場において実現されよう。つまり、需給一致による価格・交換価値の決定が、各人の事前の意図とは別に行われるのだ。これは「人間わざ」ではなく、恐らく「神の仕業」ではないだろうか。ともあれ、「神の見えざる手」のおかげで、市場は見事に運行する。このように需要・供給関係を調べ、市場による価格の決定メカニズムを解明することが、『国富論』の副次的な目的であった。

III ワルラスとマーシャル

前節で見たように、アダム・スミスの政治経済学はまず第1に富と生活資料の調達の研究であり、そして第2に交換価値と価格決定の研究であった。第1の目的があくまで主要な目的であり、第2の目的は単に付随的な目的にすぎなかった。

経済学の主要目的を第1にとるか、それとも第2にとるか——その違いがアダム・スミス以後の経済学の展開に決定的なインパクトを及ぼしてきた。200年以上に及ぶ長い経済学の歴史において、実に多様な学派が生成・発展してきた。これらの学派を分類する1つの方法として、富の研究をめざす「第1学派」と、価格決定を中核とする「第2学派」とに大別する仕方があるように思う。第1学派の代表選手がA. マーシャル (1842—1924) であり、第2学派の中心選手がL. ワルラス (1834—1910) である。ワルラスはマーシャルより8歳年長である。さらに、現代の経済学の主流は「ワルラス7割、マーシャル3割」ともいわれ、ワルラスの影響力のほうがずっと優勢である。だから、以下では、第1学派と第2学派の順序とはあべこべに、まずワルラスの経済学のことから議論を始めたい。

III—1 ワルラスの純粋経済学

ワルラスの主著『純粋経済学要論』の第1章は、「スミスの定義とセイの定

義」と名付けられている。だから、ワルラスは経済学の定義と内容にことのほか大きな関心を持っていた。ワルラスは、富の研究としての経済学の立場をとるアダム・スミスの立場を批判して、次のように述べている。

「スミスの定義は、科学としての経済学の目的を示していないという意味において、不完全である。経済学が人々に豊富な収入を、国家に十分な収入を得させることを目的とするというのは、幾何学が堅固な家屋を建築するのを目的とするといひ、天文学が海上を安全に航海するのを目的とするといひのに等しい。一言でいえば、それは科学を応用の面から定義しようとするものだ」(訳書、24ページ⁵)。

ワルラスによれば、スミスのやり方は不完全であり、「応用」の側面から経済学を定義しているという。それよりむしろ、「純粹」科学の観点から経済学の目的を考える必要がある。だから、ワルラスは自分の経済学をわざわざ「純粹経済学」と呼んで、スミス流の「政治経済学」とは一線を引こうとする。それでは、純粹経済学の内容とはどういうものであろうか。⁶

「純粹経済学は、本質的には、絶対的自由競争を仮定した制度下における価格決定の理論である」(訳書、序文Xページ)。

このように、ワルラスによって、価格決定論としての経済学の意義がはっきり前面に出されるようになり、これが現代経済学の主流の考え方に連なっていく。だが、ワルラスも「人の子」であり、富の研究を強調したアダム・スミスからの影響を完全に脱していない。実際、主著『純粹経済学』の副題は「社会的富の理論」と書かれており、「希少なために、つまり利用可能量が有限なために、価格がつく有形無形物すべてのものが社会的富を構成する。このために、純粹経済学が社会的富の理論でもあるのだ」(訳書、序文Xページ)と弁解し

5 以下の引用文は、ワルラス著、久武雅夫訳(1983)による。ただし、必要と思えば、自由に改定させていただいたことを断っておく。

6 もっと厳密に言えば、「純粹な政治経済学」といい、「純粹」という形容詞が付けられている。そして、ワルラスは「純粹経済学」のほかにも、「応用経済学」や「社会経済学」を考えた。頭の体操ならいざしらず現実的に見た場合、このような3分割はどの程度有効であろうか。

ている。そのうえ、ワルラスは後半の部分において、経済発展が社会の諸階級に及ぼす影響を論じている。

ワルラスはマルクスとともに、ボルテール、ルソーなど当時のフランス啓蒙思想の影響を強く受けていた。啓蒙思想は人間主義の謳歌に連なり、理想的な社会実現の夢を膨らませていった。「土地社会主義者」であったワルラスは、マルクスの共産主義社会に対抗して、「完全競争社会」のワーキングを分析したといえ、言い過ぎであろうか。いずれにせよ、当時の思想家は人間賛歌にあふれた理想主義に燃えていた。ワルラスもその例外ではなく、完全競争・完全情報の理想経済モデルの中に、「完全な人間社会」の夢を託したといえるだろう。

III-2 マーシャルと人間の研究

マーシャルはワルラスとほぼ同時代の人である。2人ともアダム・スミスの影響を受けているが、その受け方が相当違っているのだ。ワルラスが理想家肌で純粹論理を楽しむ人であったのに対して、マーシャルは経験主義に基づいた現実思考の人間であった。両人の生き方と感性の違いが、経済学に対する態度の違いとなって現われてくる。

ワルラスはもともと数学がそれほど得意ではなく、純粹経済学を数学的に展開するのに随分と悪戦苦闘した。これに対して、マーシャルの学部の専攻は数学であり、卒業成績第2番という優秀な成績でケンブリッジ大学を卒業した。だが、マーシャルはイギリスのスラムに住む人々の貧困の悲惨さに心を打たれて、その専門を数学から経済学に変えたといわれる。

マーシャルは経済学の権威になってからも、学生たちに次のような青春時代のエピソードをよく語った。それによると、マーシャルが経済学の研究に没頭しようとした頃、ある店の陳列窓に置いてあった小さな油絵が目にとまり、それを数シリングで購入した。その油絵には、生活に疲れはて物思いに沈んだ男の顔が写實的に描かれていた。マーシャルは油絵を「守護神さま」(patron saint)と呼んで、カレッジの部屋の暖炉の上に置いた。マーシャルは純粹経済

学の美しい論理展開に惹かれることがあったが、その度に「守護神さま」を見ては厳しい現実と呼び戻され、論理重視よりも人間重視の経済学の道を歩みつづけることになった。⁷

マーシャルの主著は『経済学原理』である。その第1章「序論」の冒頭のところで、経済学に対するマーシャルの考え方が明確に述べられている。

「政治経済学 (political economy) または経済学 (economics) は、生活の日常実務における人間の研究 (a study of mankind in the ordinary business of life) である。それは産業上・社会上の行為の中で、厚生のための必要物資 (the material requisites of wellbeing) の獲得と使用に最も密接に関係する部分を解明する。

したがって、経済学は一面において富の研究 (a study of wealth) である。だが、もっと重要な他面においては、人間の研究の一部 (a part of the study of man) なのである」(訳書、1ページ)。⁸

マーシャルはアダム・スミスの伝統に沿って、富の研究としての経済学の役割をまず認める。しかも、それより一層突き進んで、人間の研究としての経済学という立場に立つ。この点にかんして、マーシャルの次の文章は印象的である。

「経済学者が対象とするのは、あるがままの人間 (a man as he is) である。つまり、抽象的な人間ないし＜経済人＞ (an abstract or “economic” man) ではなくて、生身の血の通った人間 (a man of flesh and blood) なのである」(訳書、27ページ)。

上の文章ほど、マーシャルのマーシャルたる面目を示す文章は他にないだろ

7 このエピソードについては、ケインズの玉稿「アルフレッド・マーシャル」が詳しい(ケインズ著、大野忠男訳、1986、266—267ページ)。序でながら、夏目先生と奥様がお知り合いになられたのも、たしか油絵を通じてであったとお聞きしている。そして、お嬢さんのお名前を、「知絵」と発音が同じ「千絵」さんとされたとも伺っている。

8 以下の引用文は、マーシャル著馬場啓之助訳(1965)によるが、自由に改訳させていただいたところがある。ご容赦願いたい。

う。イギリス経験主義の立場に立つマーシャルにとって、人間の存在を抽象的にとらえ、「経済人」、「政治的人間」、「文化的人間」などを抽象するような分裂的思考方法は、それこそ学者の「良心と常識」(conscience and common-sense)に反するものであったにちがいない。数学的素養に富んだマーシャルにとって、抽象的な経済人の想定の上に、エレガントな数理分析を駆使することは、いとも易しい仕事にあっただろう。しかし、マーシャルは研究室の暖炉の上の「守護神さま」を眺めては現実に戻り、あるがままの生身の人間の行動の研究という困難な仕事のほうを選んだ。「冷静な頭、だが暖かい心」(cool head but warm heart)⁹——これがマーシャルの生き方を導く信条であった。

経済学に立ち向かうワルラスとマーシャルの相違は、もっと具体的な経済モデルの構築において顕著に現われる。ワルラスの経済学の出発点は「競争の点からみて完全な組織を持っている市場」(訳書, p. 63), つまり抽象的な完全競争市場の世界である。各人はいわば「大海の中の一滴」として無力な受け身の存在である。与えられた価格と初期存在量のもとで、各人は効用極大化や利潤極大化を行い、その結果として需要関数や供給関数が出てくる。しかも、多数の財が異なった市場で同時に取引される「一般均衡分析」こそが、ワルラスの経済学の特徴である。

これとは対照的に、マーシャルの経済学の世界は、生身の人間が互いに入り乱れる不完全競争の世界である。数学的なエレガントさを求めず、具体的な特定財の市場の分析に焦点を合わせた「部分均衡分析」を活用する。マーシャルは「外部経済」や「外部不経済」の概念を導入し、ある個人の行動が他の個人の利得の増減に関係することに注目する。また、各々の企業がすべて同質的であるとは限らず、収穫逦増の企業も収穫逦減の企業もある。森の中にシンボリックな樹木があるように、産業の中にも代表的な企業があるのだ。生産活動を考

9 一般には、この有名な言葉は「冷静な頭と暖かい心」というように、「と」を付けて並列的に紹介されている。だが、私見によると、中間の接続詞「だが (but)」の存在はもっと注意されてよい。現代では、「暖かい心、だが冷静な頭」を持つ学者が輩出することが期待されている。

える場合には、資本・労働・土地の3要素だけでなく、「組織」のあり方という第4の要素も考慮する必要がある。

マーシャルはピグー、ケインズ、ロバートソンなど、多くの優れた弟子たちに恵まれた点においてワルラスより幸せであった。マーシャルが創設した「ケンブリッジ学派」は、不完全な人間が作った経済が完全であるはずがない、という認識を共通に持っていた。だから、自由放任主義に基礎を置く価格決定論に対して、批判的態度をとりつづけた。それはともあれ、マーシャルの経済学は一貫して、アダム・スミスによる富の研究を推し進めた「人間の研究」であったのである。

IV 厚生経済学の展開と停滞

一昔前までは、「ピグーといえば厚生経済学、厚生経済学といえばピグー」といわれたものだった。ピグーと厚生経済学は、ほぼ同意語とみなされ、それが世界の経済学界をリードしていた。だが、現代においては状況が変化し、ピグーの存在は経済学の主流からやや離れた位置にあるようだ。世紀末を迎えて、世界は混乱と激変のさなかにある。だから、経済学の舞台の主役と脇役が再び入れ替わり、ピグーの経済学が再度脚光を浴びる日が来るかもしれない。以下、厚生経済学の展開と停滞を順次明らかにしていきたい。

IV-1 ピグーの厚生経済学

A. B. ピグー (1877—1959) は、人間の研究を進めたマーシャルの愛弟子であった。ピグーはアカデミックな世界にこもって、真面目に研究するタイプの学者であった。ピグーがケンブリッジ学派の伝統をついで、「冷静な頭」の中に非常に「暖かい心」を持っていたことは、主著『厚生経済学』(1920)の「序文」の最後にある次の文章からよくうかがえる。

「経済学者がやり遂げようと努力している複雑な分析は、単なる頭の体操 (mere gymnastic) ではない。それは人間生活の改良の道具 (instruments for the bettering of human life) である。我々を取り巻く悲惨と不潔、数百

万のヨーロッパ人の家庭において消えようとする希望の炎、一部富裕家族の有害な贅沢、多数の貧困家庭をおおう恐るべき不安——これらのものは無視できないほど明白な害悪である。我々の科学の求める知識によってこれを制御することは可能である。暗黒から光明を！(Out of the darkness light!) この光明を探し求めることは、〈政治経済学という陰惨科学〉(the “dismal science of Political Economy”)がこの学問の訓練に直面する人々に向かって提供する仕事であり、この光明を発見することは、恐らくその褒賞なのである」(訳書、I, p. 61)¹⁰。

ピグーの厚生経済学は、単なる頭の体操ではなく、人間生活の改良をめざしていた。人々の貧乏・悲惨・不潔・不安などを救おうという意図は、多くの読者の共感を呼んだことだろう。だが、残念ながら、その議論は明晰さに欠けるものがあり、ときには非常にまわりくどいものがあった。ピグーの地味で用意深い性格が書物にも反映していたのであろうか。それはともあれ、以下において、ピグーの経済学の内容を詳しく調べてみよう。

研究の目的は、厚生(welfare)を推進する実際の措置をさらに容易にすることである。だが、そもそも厚生とは何であろうか。ピグーによると、厚生とは範囲が非常に広いものであるから、その内容にかんして一般的な議論をする必要がないという。そしてただ、厚生 of 要素とは、満足・不満足を示す人々の意識の状態であり、大小比較が可能なものである、とあいまいに述べるにとどまっている。私見によれば、ピグーは「厚生とは何か」についてもっともっと綿密に議論すべきであった。あとで詳しく議論するように、この点の突っ込みの不足が、後代における厚生経済学の停滞と挫折を招くことになるのだ。

厚生 of 範囲があまりにも広いので、ピグーは其中で「直接もしくは間接に貨幣という測定尺度にかかわる部分」を取り出し、それに「経済的厚生」(economic welfare)という名前をつける。問題は、経済的厚生と非経済的厚生との

10 以下の引用文は、ピグー著、気賀健三ほか訳(1953)による。だが、筆者が現代風に改訳した部分があることをお断りしておきたい。

間に、明確な境界線が引けないことである。だが、用意周到なピグーにしては珍しく、経済的厚生を増大と、社会の総厚生を増大とは大体比例するのだ、という荒っぽい議論を展開する。そして、このように定義した経済的厚生が経済学の対象である、という。

それでは、一国の経済的厚生の大きさは一体何によって増減するのだろうか。それは正確には、各個人の効用水準の総計によって測られるべきであるが、そのような測定には困難がつきまとう。実際のところ、人々の効用自体が目に見えず、観測不可能なものである。ピグーはこのような困難を避けるために、経済的厚生そのものではなく、その「客観的対応物」たる「国民分配分」(national dividend)を取り上げる。

さて、経済的厚生の極大と、貨幣で測られた国民分配分の極大とは果たして一致するのであろうか。一般には、両者は一致しない。だが、もし人々の多くが似た者同志で、各人の貨幣の限界効用がほぼ同じであれば、このような近似が可能となるだろう。だから、このような近似理論は実務的だが、科学的な正確さに欠ける。

上のように、ピグーの議論をみると、気持ちは分かるが論理は少々荒っぽいことが分かる。だから、大著『厚生経済学』の出版以後、ピグー理論は激しい批判にさらされ、その反動として、厚生経済学の退化現象が出てしまった。その点はあとで詳説¹するとして、800ページに及ぶ大著から導かれた結論は、次のように至極健全なものであった。

「社会の経済的厚生は、(1)国民分配分の平均量が大きければ大きいほど、(2)貧者に帰属する国民分配分の平均取得分が大きければ大きいほど、また(3)国民分配分の年々の量と貧者に帰属する年々との変動が少なければ少ないほど、ますます大きくなるらしい」(序文、訳書、p. 59)

このようなわけで、ピグーは国民総生産というパイの大きさだけでなく、富者と貧者へのパイの分配をも問題にし、さらにその変動にも言及している。私見によると、分配と変動という第2と第3の論点は大変重要であり、「暖かい

心」の問題に関係する。しかし、後でみるように、ピグー以後の厚生経済学者の関心は、「冷静な頭」どころか「凍った頭」で論理の厳密さをあまりにも重視するようになり、ただ効率的生産という第 1 の問題のみに集中するようになってしまった。¹¹

分析用具の点からみると、ピグーは限界理論と均衡理論を最大限活用した。そして、大著の中には、「限界」と「代替」という形容詞のついた理論装置がいたるところに出てくる。ピグーは特に外部経済・不経済が存在する場合、私的限界純生産物の価値と社会的限界純生産物の価値が等しくなれないと鋭く指摘した。このままでは、資源の最適配分の実現が不可能になるので、政府による課税と補助金による誘導が必要になってくるというのである。だが、ピグーのいう外部性の問題は生産サイドのほうに余りにも傾斜していたため、消費サイドの外部効果の問題が軽く考えられていたようである。私見によると、後者の問題は前者の問題より深刻である。というのは、ピグー的な課税・補助金方式による解決は、一般消費者の間では実際上「ミッション・インポシブル」であろうからである。

ピグーは1937年に啓蒙書『社会主義と資本主義』を執筆した。これは、厚生経済学の立場から両体制の優劣比較をしたものである。もっと具体的にいえば、富と所得の分配・生産資源の効率的配分・失業・能率とインセンティブなどの観点から、ピグーは資本主義と社会主義のいずれが優れた経済体制であるかを学者らしく用意周到に議論した。

11 一部の現代経済学者が数学的厳密さを追うあまり、現実観察を怠っているようにみえるのは残念でならない。ゲーム理論の創始者の1人であるモルゲンシュテルンは、かつて次のように述べたことがある。「17世紀における物理学、とくに力学の飛躍的進歩は、それ以前における天文学の発達があってこそ可能となった。その背後には、天文学上の系統的・科学的観察の膨大な集積があったのだ。……このようなことが、経済科学には未だ起こっていない。物理学において、ティコ・ブラーエなしにケプラーやニュートンの出現を期待するのは、土台無理であっただろう。ましてや、経済学において、学問の発展が物理学よりやさしいのだ、と楽観できる理由は何ひとつない」（シューマッハ、1973、244ページより再引用）。この点については、森嶋通夫教授（1994）も同様な警告をしておられる。

ピグーは比較体制分析をする際、非常に慎重である。「序文」の中には、次のような文章がある。

「何らかの政治的綱領を弁護あるいは反対する立場に立つということは、アカデミックな経済学者の任務でも能力の範囲内のことでもない。ただ議論に関して考慮しなければならない重要な点を——経済にかかわるかぎり——整然とした仕方で説明することは、学者の任務であり能力の範囲内にあるはずである。資本主義と社会主義の論争について、まさにそのことを本書で試みようとするのだ¹²」。

社会主義と資本主義の論争——これは20世紀最大の問題の1つであった。ここであえて「あった」と過去形を使ったことに注意してほしい。ベルリンの壁の崩壊からソ連邦の消滅によって、社会主義や共産主義の勢力が元気を失ったためか、社会主義対資本主義の問題は忘れられつつあるようだ。だが、経済学の主流派があれほど市場経済の効率性と最適性に気を使った背後には、「社会主義なにするものぞ、資本主義こそ経済厚生¹³の点でベストのシステムなのだ」というライバル心があったことを忘れてはならない。20世紀末を迎えた今こそ、経済体制と厚生¹³の問題を整然とした仕方で説明することは——ピグーの言葉にあるように——学者の任務であり能力の範囲内にあるはずである。

IV-2 旧厚生経済学から新厚生経済学へ

ピグーの経済学は、「人間生活の改善」をめざす学問として画期的なものであった。ピグーがそもそも関心を寄せたことは、貧困・悲惨・不潔・不安・無

12 ピグー著、北野熊喜男訳（1966）、123ページ。社会主義の大国ソ連が崩壊した今こそ、「社会主義対資本主義」の問題が再検討されねばならない。そのさい、拙稿（1994）で試論を展開したように、情報と流通という新しい視点の導入が必要になるだろう。

序でながら、ピグーの現実主義を示すものとして、次の文章を引用しておきたい。「組織の問題は非常に恐るべき問題であり、理念的に劣るにせよ相当スムーズに機能する体制は、理念的に優るにせよギシギシガタガタ作動する体制よりも、全体として優れているだろう」（訳書、97ページ）。

13 かつて、「市場社会主義」の可能性がパローネやランゲなどによって大々的に論じられたことがある。最近の研究については、夏目隆教授の力作（昭和54）を参考にされたい。また、現実の社会主義の「歪んだ世界」については、ヴィネッキ著、福田亘はか訳（1988）が興味ある書物である。

知など、当時の人々の痛ましい生活の状態であった。ところが、大著『厚生経済学』における議論の展開をみると、当初のかくもまことに雄大な構想がだんだん萎んでいき、ついには「経済厚生＝各個人の効用の総和＝国民分配分」という関係式が近似的に成り立つ世界だけに分析を狭く限定してしまった。このような結果として不幸にも、狭い世界におけるピグーの経済学への批判が噴出し、経済分析の対象がさらに狭いものになってしまった。

ピグーの厚生経済学への最大の攻撃の的は、相異なる個人間の効用が比較できる、という仮定に対してであった。L. ロビンズは攻撃の旗手であって、倫理上の価値判断なしに個人間の効用比較を行うことは不可能である、とピグーを激しく非難した。もし経済厚生の問題をただ各個人の効用レベルでの話しだけに狭く限定するかぎり、ロビンズの非難は冷徹な弁論術の上からは的を得ていると受け止められた。さらに、当時の経済学の潮流はマーシャル流の富の科学からワルラス流の価格決定の科学へと傾斜していた。というのは、共産主義社会のユートピアに対抗できるものとしては、不完全な「あるがままの人間」という現実的な世界よりも、完全競争・完全情報の世界という「もう1つのユートピア」のほうが強力であるように思われたからである。

ロビンズはワルラスの方向をさらに突き進めて、次のように経済学の目的をごく狭く限定した。

「経済学とは、代替的用途をもつ稀少な諸手段と諸目的との関係としての人間行動を研究する科学である」(辻六兵衛訳(1957), 25ページ)。

人間行動の科学とはいうものの、問題となる人間は、一定の目的のために稀少な手段をいかに効率よく利用するか、という点のみに腐心する抽象的な「経済人」である。そこには、情報不足で選択に迷い、慣習と義理にも影響される「生身の人間」が活躍する余地が残されていないのだ。ロビンズが考えるような合理性一辺倒の人間の姿は、共産主義者マルクスが想定した人間像と相通じるものがあるのは皮肉であろう。というのは、マルクスにおいても、資本家は「人格化された資本」とみなされ、感情や慣習を無視し、ただ労働の搾取極大

化に走る人間と考えられていたからである。「両極端はとなり合わせ」ということだろうか。

この点の議論は後で再び行うとして、当時の経済学界においては、ロビンズの批判を免れた厚生経済学の新体系を樹立することが急務の課題となった。このような「新厚生経済学」の特徴は、ピグー流の「旧厚生経済学」とは異なり、個人間の効用比較を含まない経済厚生¹⁴の極大化概念を新しく設けることであった。その概念とは、ローザンヌにおけるワルラスの後継者たる V. F. D. パレート (1848-1923) によって唱導されたものであり、特に「パレート最適」(Pareto optimality) と呼ばれている。

少し厳密に定義すれば、パレート最適の状態とは、「ある社会において、ある期間における利用可能な資源量、各生産者の技術、および各消費者の選好が与えられている場合に、他のすべての消費者の状態を悪化させることなく、少なくとも 1 人の消費者の状態を良化させるような再編成がもはや不可能であるような状態」である。すなわち、経済厚生¹⁴の極大は、いかなる個人をも不利にさせることなく、しかもすべての個人が最有利に進むときに達成されると考える。

もっと具体的には、パレート、パローネ、ラーナーなどによって代表される新厚生経済学の学者たちは、各種の無差別曲線と変形曲線を用いて、競争均衡とパレート最適の関係を厳密に吟味し、次のような「厚生経済学の基本定理」(the Basic Theorems of Classical Welfare Economics) を樹立することに全力を注いだ¹⁴。

「すべての競争均衡はパレート最適であり、またすべてのパレート最適は競争均衡である。すなわち第 1 に、完全競争のもとで、各消費者が効用の極大化を行い各生産者が利潤の極大化を行う場合には、価格システムを媒介としておのずから、消費財および生産財のパレート最適配分が達成される。そ

14 厚生経済学の基本定理の詳細については、クワーク＝サボズニック著、田村・樺本訳 (1968) やアロー＝ハーン著、福岡・川又訳 (1971) を見られたい。

の逆に第2に、消費と生産のパレート最適配分状態のもとでは、その点に内在している潜在価格システムのもとで、各消費者は効用極大、各生産者は利潤極大の状態に達している」。

言うまでもないことだが、厚生経済学の基本定理の有効性は、パレート最適の概念の妥当性によって決定的に左右される。ところが、パレート最適の概念自体が自明なものでなく、いろいろな問題点を含んでいるのだ。まず第1に、パレート最適の状態を定義するのに、ある時と所において、ストックの資源量が与えられたものとして、フローの取引量のみを問題とする。だが、出発点においてストックの分布が著しく不平等であれば、仮にフローの調整が行われても、貧者の持つ不公平感はほとんど払拭しないだろう。実際のところ、バブル的な投機によって土地価格が急騰すれば、土地を持つ者はたちまちにして「土地成金」となり、持たざる者はささやかな「マイホーム」の夢さえ破れてしまうだろう。

第2に、パレート最適の考え方は、人間の最も根源的な感情を無視している。それは、人間の幸福の状態が他人の状態によって大きく影響を受ける、という点である。同情や共感などはプラスの「外部効果」だが、それはおおむねそれほど強くない。それよりはるかに強い感情は、ねたみ、そねみ、うらみ、いじめ、はらいせなどのマイナスの「外部効果」である。他人の不幸は蜜の味であり、有名人のゴシップやスキャンダルほど、一般人の優越感を回復させるものは他にないかもしれない。だから、選挙が白熱してくれば、どの候補者も自分の政策の宣伝よりも、対立候補を中傷することに熱心になりがちである。

いま、次のような5つの分配方式を考えよう。

- A. (富者, 貧者) = (100, 20)
- B. (富者, 貧者) = (200, 60)
- C. (富者, 貧者) = (200, 21)
- D. (富者, 貧者) = (70, 50)
- E. (富者, 貧者) = (215, 15)

数量の単位は任意にとってある。普通は金銭単位だろうが、プールや劇場の利用回数、近隣公園や緑地の大きさなど、非金銭的だが快適な生活を送るに必要なものの一切が数量化されていると考えてよい。分配方式Aが出発点だと想定する。

分配方式がAからBに変更されるとしよう。富者は2倍ゆたかになり、貧者は3倍ゆたかになる。だから、方式Bは方式Aより「パレート改善」されている。この場合は、富者も貧者も文句を言わず、方式の変更を受け入れる可能性が大である。だが、方式がAからCに変更された場合はどうであろうか。CはAよりパレート改善されているものの、貧者の状態の改善は微々たるものであり、貧富の格差は以前よりはるかに開いているのだ。マーシャルのいう「生身で血の通った人間」ならば、AからCへの変更を喜ばないであろう。一般の貧者の立場からすると、AからDへの改革が望ましいものである。だが、この改革案には富者が反対するであろう。また、一部の富者にとっては、方式Eの採択が最も歓迎されるであろう。例えば、累進所得税率の大幅軽減と消費税率の引上げが同時になされれば、その効果はAからEへの変更に等しいものとなる。

紙面の制約のため、具体的な話はこの程度にする。要するに、「消費の外部効果」は経済活動の至る所にみられるのだ。この事実を無視した議論は、人間世界を感情なきロボットから成るとみるようなSFの世界である。皮肉な見方をすれば、パレート最適の考え方は、「煩惱多き資本主義社会」よりも、「精神高潔な人間から成る共産主義社会」に対してのほうが有効性を発揮するだろう。もっとも、人間が悟りを開き物欲がミニマムとなると、方式Aがどうの、Eがどうの、という比較自体がナンセンスとなってしまう¹⁵だろう。

15 消費の外部効果の重要性を説いた学者の中に、ヴェブレン著、小原訳(1899)がいる。宇澤弘文教授(1989, 1995)が指摘されるように、ヴェブレンの「見せびらかし効果」などに見るような、人間行動の制度的制約は普遍的なものである。ラッセルの「幸福論」(1930)を読むと、人間を不幸にする最大の要因が「ねたみ」(envy)であることが分かる。

IV-3 一般均衡理論との関係

以上のようなわけで、パレート最適の概念には致命的な難点があり、厚生経済学の展開は1960年前後には、拡大過程どころか、縮小過程に入ってしまった。例えば、サミュエルソンの弟子グラフは、名著の最後のところで次のような慨嘆をしたあと、学界を去ってしまった。

「有益で興味ある厚生経済理論——すなわち、限界代替率の均等条件などの不毛な形式主義に立つ伝統的理論を何とか乗り越える理論——を樹立できる可能性は、実は極めて小さいのである」(グラフ, 1957, p. 169)。

グラフによる悲観的な結論は、当時における厚生経済学の閉塞状況をよく反映している。だが、1960年代に入ると、グラフの嘆きを逆撫でするかのように、はるかに数学的に高度で緻密な理論体系が全面開花するようになった。それが「一般均衡理論」(general equilibrium theory)である。60年代は米ソの冷戦構造が激化し、互いに相手を意識して熾烈な経済競争を展開していた。したがって、当時のアメリカの「切れ者」の学者が、分離定理や不動点定理を駆使して、市場経済のワーキングに対して理論の完全武装することは十分意味を持っていた。パズルを解くと同様に、高級数学で市場を分析するのは楽しい仕事である。しかも、当時のアメリカ社会はずばぬけて豊かで、研究補助金が潤沢だったから、一般均衡理論の研究はたちまちにして優秀な頭脳を虜にした。

一般均衡理論の代表者はL. W. マッケンジー, K. J. アロー, G. ドブリューなどの学者である。紙面の関係上、詳細な展開は別の機会にゆだねて、骨格だけを述べよう。話を単純にするため、生産の問題を外した交換経済を取り上げる。いま n 人の人間がおり、 m 個の財について、互いに交換取引をすると想定する。交換の開始点において、各人の初期存在量が与えられているが、そのような初期配分は神聖不可侵であって、議論の対象とはならない。例えば、富者と貧者の力関係は両者間の取引に大きな影響を及ぼすだろうが、そういう生々しい問題を排除して、抽象的に単に個人1と個人2の取引の問題に還元可能

¹⁶
とする。

各人は目的合理的な「個人主義」の権化である。つまり、財やサービスの消費にあたっては、伝統や秩序の影響を受けず、他人の行為から独立して、自己の選好順序や効用レベルが最大となるように消費量を決める。選好順序はいわゆる「完全順序」であって、「何がなんでも魚が欲しい」、「肉は一切食べない」というような偏食やこだわりは認めない。他方、「隣家が衛星放送用アンテナを付けたから、うちもアンテナを付けなくては」、「隣の芝生は青い」というような人間感情の存在も許容しない。さらに、選好や効用は連続的であり、取引可能集合は凸性やコンパクト性などの良い性質を持っている。

各人は全知全能であり、不確実性は存在せず、判断に間違ふことはありえない。また、各財は完全に分割可能であって、家屋・土地・車・電化製品などの耐久財の存在は無視する。市場においては、誰と誰が何を持ち、何を欲しがっているかが瞬時に分かる。だから、取引のための特別の設備や場所もいらなし、取引費用も要らない。各人は正直に自己の選好を申告するので、ウソをつくとか、駆け引きをすとか、情報操作をすとかいう、人間臭い問題は発生しない。詐欺やモラルハザードの問題もなく、 n 人 m 財の取引が摩擦なく一瞬のうちに完了する。こうして、各市場の取引財貨について、需給一致の均衡価格が同時に決定される。

上のような厳しい仮定の下に、一般均衡が成立するかどうかを調べるのが、「存在問題」(existence problem)である。均衡解が存在しても、複数では困る。だから、均衡解がただ1つ存在するかどうかを吟味するのが、「一意問題」(uniqueness problem)である。また、均衡からわずかでも外れたとき、もとの均衡に戻るかどうかを検討するのが、「安定問題」(stability problem)である。最後に、一般均衡解がパレート均衡とどういう関係にあるのかを精査するのが、

16 一般均衡理論の詳しい展開については、アロー＝ハーン著、福岡・川又(1971)が最も体系的である。筆者は夏目隆教授とはほぼ同時期にロチェスター大学にて、大家マッケンジーの名講義を受けることができた。恐らく、一般均衡理論は、アメリカの黄金時代を反映した最も壮大な「経済学建築物」であろう。その論理的緻密さと精巧さでは、現代のゲーム理論も敵わないところがある。

「厚生問題」(welfare problem)である。

1960年代は一般均衡理論の黄金時代であった。私自身アメリカにて、「プロフェッサー一般均衡」という異名を持つ大先生の授業を拝聴した。今から振り返ると、当時は「数学的に高尚な議論で完全武装」することが有意義であるかのような「空気」が存在した。この「空気」に触れないものは、いわば「アウトロー」としての待遇しか受けかねない情勢だった。個人の合理的選択とは離れて、学界全体の空気に吞まれた形で、個人主義一本槍の一般均衡理論を有り難く勉強していたわけである。何という皮肉であろうか。

上で要約したように、一般均衡理論の世界に住む人間は、機械的なロボットのような存在である。マーシャルの「人間の研究」でいうところの「あるがままの人間」や「生身で血の通った人間」ではないのだ。この一般均衡理論において、価格決定論としてのワルラス流の経済学は一応のゴールに到達したと言ってよいであろう。だが、そのゴールは何と冷え冷えした非人間的なものなのだろうか。

V 現代の経済学

経済学で発見された法則の中で、最も強力なもの1つは「限界生産力減少の法則」である。それは、一定の臨界点を越えると、仕事の能率がやがて下がっていく、というものである。この法則の有効性は、経済学の論文の生産性に対しても妥当するのだ。1970年代に入ると、さすが全盛を誇った一般均衡理論も陰りを見せはじめた。そして、アンチテーゼとしての新しい学問が舞台に登場することになった。その1つが「リスクと情報の理論」(theory of risk and information)の樹立であり、もう1つが「ゲーム理論」(theory of games)の応用の新展開である。まず本節では、人間の科学という立場から、リスクと情報の理論の意義について論じてみたい。この理論はアロー、アカロフ、スティグリッツなどの学者によって精力的に展開され、今日でもホットな話題を提供している。

V-1 リスクと情報の経済学

すでに詳述したように、一般均衡理論の妥当性は、大小さまざまな仮定に依存している。そのような大前提の1つが、完全情報である。世の中には、いろいろなリスクや不確実性が存在する。だが、もし当該個人の予知能力が完璧であるならば、伝統的な一般均衡理論をリスクの世界にまで拡張するのは困難ではないだろう。それは財の定義を拡大解釈するだけですむからである。

例えば、天候リスクがある世界では、「北海道旅行」をリスクの状態に応じて多分割し「晴れのときの旅行」、「雨のときの旅行」などの市場を想像すればよい。注意して欲しいのは、完全情報の世界といっても、個人が旅行計画を下す「事前」の段階では、1か月後の天気が晴れなのか、雨なのかが分からない、ということである。ただし、計画を「事後」的に実行に移す以前の中間段階において、的中率100%の天気予報が入手できる。だから、もしこの意味での情報が完全に利用可能ならば、「晴れのときの旅行」の市場、「雨のときの旅行」の市場など、いわば「条件付き財」の各市場が事前に開かれ、需給が一致するところで、各均衡価格が決定されるだろう。

もちろん、「条件付き財」の市場という考え方自体には無理があり、そんな市場など現実に存在しないのが通例である。だから、これも「頭の体操」以上の意味を余り持たないだろう。

リスクがある世界において一層興味があるのは、情報が不完全であるケースである。この場合には、意思決定を行う際、リスクに対する当該個人の態度が重要となる。多くの人はリスク回避者であろうが、たまにはリスク愛好者もいるだろう。また、同じリスク回避といっても、その程度は、人の性格・資産量・周囲の状況などのファクターによって変化するだろう。このようなリスク回避を考慮にいれるとき、リスクと情報の経済学で中心的役割を果たす理論が、「期待効用理論」(expected utility theory)である。この理論によると、各状態に応じて利得を計算し、さらに利得の効用の確率的期待値の大小の程度が、¹⁷人々の行動指針になるという。

不完全情報の世界で活躍する人間は、単なる抽象的な人間ではない。事実、リスクや不確実性を前にして、恐れおののく生身の人間の姿が「ある程度」意識されている。だがそれも「ある程度」にすぎず、リスクの中で最大化・最小化を図るという姿勢には変りはない。「合理的な経済人」という枠組みから、半歩ばかり出ているのにすぎないのである。

さて、情報の分布が人々の間で平等でない場合には、事態はどうなるのだろうか。実はこの時には、リスクの経済学に特有な不可思議な現象が輩出するのだ。まず第1に、「モラルハザード」(moral hazard)と呼ばれる現象である。例えば、火災保険の加入者が防火施設の整備を怠ったり、自動車保険加入者の運転がめっぽう荒くなるということがある。このように、保険の加入という契約自体が、事故額や事故確率というパラメーターに影響を及ぼす。

次に、「逆選抜」(adverse selection)ないし「レモンの原理」(lemons principle)という現象も発生する。例えば、中古車市場では買い手にとって、どの車が整備良好な「低リスク」の車なのか、欠陥のある「高リスク」のクルマなのかを判別するのは至難の業である。だから、中古車市場では、高リスクも低リスクも十把ひとからげにした「平均品質」の値段が、クルマの値段となろう。従って、売り手は買い手の無知を利用して、レモンと呼ばれる欠陥車から売りに出そうとする。その結果、中古車市場に出回るクルマはレモンのみとなって、「良貨」が「悪貨」によって駆逐される。もちろん、このような状態が続くと買い手の期待を裏切るから、市場の機能はやがて停止せざるを得ない。

このように、伝統的な一般均衡の世界では均衡解の存在証明が問題になったのに対して、この「非対称情報」の世界では均衡の不存在のほうが問題となる。これは一般均衡理論に対する1つのアンチテーゼとみなされよう。とくに、「高リスク」の人々が「高リスクです」と正直に自己申告しない可能性を説く点では、生きた現実の人間の姿が多少とも描写されている。だが、期待効用理

17 リスクと情報の経済学については、筆者自身多くの著作を執筆してきている。とりわけ、酒井泰弘(1982, 90, 91)の三部作を参考にしてもらいたい。さらに、拙稿(1995)をも参照されたい。

論が無批判的に援用されている点において、逆選抜の立脚点はまだまだ保守的なのである。

さらに、「自己選抜」(self selection)という事態も発生しうる。例えば、教育市場において、同じ大学の卒業生は——成績がピンからキリまでであるのにかかわらず——同一の待遇をうける。それによって、「低飛行」の学生はトクをし、「トップクラス」の学生はソンをする。そして、高校生は「有名校」への入学をめざして、社会的にムダな「分捕り合戦」(rat race)をするだろう。これも面白い分析だが、分析用具がやはり期待効用理論であるため、「血気」¹⁸、「支配欲」などの「非経済的ファクター」が活躍する余地がほとんど与えられていない。

ここで注意を1つ。リスクの経済分析は近年発展しているが、そのいずれもが「確率計算」が可能という前提に立っている。だが、神戸大震災の例が示すように、予測ができず、人々の意表をつく場合がある。このような「予想外の出来事」に対しては、現在の分析はお手上げである。将来において、この方面の研究が待望されよう。

V-2 ゲーム理論の新展開

ゲーム理論は、20世紀を代表する科学の1つである。応用数学の巨星J. フォン・ノイマンと経済学の重鎮O. モルゲンシュテルンは、1944年に共同著作『ゲーム理論と経済行動』を世に問い、人間と人間との「戦略的依存関係」に新しい分析の光を投げかけた。

ゲーム理論の出発点は「2人非協力ゲーム」(two-person noncooperative game)である。そして、ワルラス流の一般均衡理論の手法とは正反対に、2人、3人、4人、……と徐々にプレイヤーの数を増やしていく。実は、これはワルラスより先輩の孤高の天才A. クールノー(1801—1877)によって100年以上も

18 「血気」(animal spirit)という言葉は、ケインズの『一般理論』(1936)に初めて出てくる。ケインズによると、企業家の投資活動を背後から支えるものは、目的合理的な確率計算ではなく、「何かをやってやろう」という盲目的な血気である。J. ロビンソン(1971)はケインズ・サーカスの一人であり、ケインズの「血気説」をよく継承している。

前から提唱された手法であり、プレイヤーの数が無限大になったときに、われわれはワルラスの完全競争の理想世界に入る。完全競争の世界では各人は「大海の中の一滴」のように無力な存在であるが、人数が有限の不完全競争の世界では、各人の行動は他人の利害に影響を与える。この点において、ゲーム理論は一般均衡理論より現実志向の強い学問である。¹⁹

ゲーム理論において中心的役割を果たす均衡概念が、「ナッシュ均衡」(Nash equilibrium)である。そして、このナッシュ均衡自体が、寡占市場における「クールノー均衡」(Cournot equilibrium)を一般化したものにはかならない。文学的表現を用いれば、クールノーの妖怪がワルラスの山脈を越えて、100年後にゲームの平原に再登場してきたわけである。²⁰

それでは、ゲーム理論のナッシュ均衡とは何であり、どのような人間関係を描写するのであろうか。ここでも、一般均衡理論の世界と同様に、基調をなす思想は「個人主義」であり、各プレイヤーは自己の利益の最大化を目指す。だから、私利を多少犠牲にしても全体の「和」を大切にすることもないし、全体の「空気」や「前例」のために個人の選択が制約されることもない。ゲームのプレイヤーは、やはり合理性一辺倒のワルラス流の「経済人」であって、生身で血の通ったマーシャル流の「あるがままの人間」ではないのだ。

しかし、ゲーム理論の世界が一般均衡理論の世界と決定的に異なる側面がある。それは前者の世界では、プレイヤーの数は有限であり、各人の利用可能な戦略数も有限であるため、プレイヤーはもはや受け身で無力な存在ではない、という点である。例えば、駅前のはとやスーパーの売れ行きは、消費者の需要

19 クールノーはワルラスより先輩だが、現代のゲーム理論の先駆者と目される孤高の天才である。クールノーの経済学とフランス革命の関係については、日本経済新聞社編(1995)所収の拙稿「クールノー」が詳しい説明を与えている。

20 ゲーム理論はフォン・ノイマンとモルゲンシュテルン以後、しばらく中だるみの状態が続いた。ところが、1980年代後半に入って、ゲーム理論は新展開の局面を迎えている。ちなみに、1994年のノーベル経済学賞の受賞者は、ナッシュ、ゼルテン、ハーサンニという3人のゲーム理論家であった。私見では、ゲーム理論は人間行動よりも、動植物の行動を説明する理論として一層有効であろうと思っている。ゲーム理論のやさしい解説については、筆者の入門書(1995、第7章)を見よ。

のほかに、つばめやスーパーが安売り戦略を採るかどうかによって左右されよう。このように、人間の戦略的相互依存関係にメスを入れる点において、ゲーム理論は一般均衡理論より現実的で有効な理論である。

文学的にいえば、ナッシュ均衡とは、「ゆめゆめ動くな」という拮抗状態のことである。もっと正確に言えばこのようになる。いま、相手の戦略が動かないとき、自己の戦略だけを動かすことによって、利得を自分に有利な方向に変えることが可能となるとき、その人にかんする「ナッシュ改善」だと呼ぼう。すると、ナッシュ均衡が成立しているとは、どの人についても、そのようなナッシュ改善がもはや可能でないような状態のことである。

ナッシュ均衡は便利な均衡概念であり、実に多用されている。だが、「好事魔多し」というとおり、その難点も否定できないのだ。ナッシュの世界の人間像は、受け身で「守りの人間」である。つまり、「相手が動かなければ、自分も動かず」という自己防衛的な人間である。だから、「相手を動かすため、自分から動こう」というような陽動的な行動や、「相手が動こうと動くまいと、まず自分が動くのだ」という積極的な行動が把握されていない。だから、ナッシュ均衡で記述できる世界には限界があり、これに代わる新しい均衡概念の導入が待たれるのである。

さて、読者は「赤信号みんなで渡れば怖くない」というビートたけしのギャグを覚えておられるだろうか。私見によれば、このギャグは、ゲーム理論の個人主義哲学に対して大いなる挑戦状をつきつけるものである。話を分かりやすくするため、「道路横断ゲーム」を考案してみる。プレーヤーは、「ヒト」と「クルマ」の2人である。ヒトが道路を横断しようし、クルマは道路上を走っている。図1にみるように、ヒトもクルマも、採用可能な戦略は「進行」と「停止」の2つである。したがって、4組の戦略の組み合わせが可能となる。

まず、ヒトがひとりで道路を渡るケース(A)を取り上げよう。もしヒトとクルマがともに進行すれば、衝突は避けられないだろう。この場合、ヒトの被害のほうが大きいことを考慮すれば、利得のペアは(ヒト, クルマ) = (-20,

(A)
ひとりで渡る場合

		ク ル マ	
		進 行	停 止
ヒ ト	進 行	-20, -5	(10, -2)
	停 止	(-1, 10)	-2, -3

(B)
みんなで渡る場合

		ク ル マ	
		進 行	停 止
ヒ ト	進 行	15, -30	(10, -2)
	停 止	-1, 10	-2, -3

図1 赤信号みんなで渡れば怖くない
——道路横断ゲーム——

-5) のようになろう。逆に、もしヒトとクルマの両者が停止すれば、時間のロスという軽微な被害が出る。クルマの再発進のほうが大変なので、利得のペアは(ヒト, クルマ) = (-2, -3) のごとくになる。交通が一番円滑に運ぶのは、第3の場合、すなわち一方が進行し、他方が停止する場合である。図1の行列の非対角要素が示すように、進行した者がトクをし、停止した者がソンをする。

道路横断ゲームがケース(A)のようであれば、そこには2つのナッシュ均衡が存在する。そのひとつは(進行, 停止) = (10, -2), もうひとつは(停止, 進行) = (-1, 10) である。これは当然の結論である。なぜならば、当事者2人のうち、一方が進行し他方が停止すれば交通事故が起こらず、双方ともにトクをするからである。問題はナッシュ均衡が2つあること、つまり、ヒトとクルマのうちで、どちらが相手に譲るかということである。できることなら、ヒ

トもクルマも、停止するより進行したいと考える。

その解決策は2つある。第1の方策は、「進行」と「停止」を五分五分の確率でミックスさせるという「混合戦略」(mixed strategy)を採用することである。平たくいえば、ヒトとクルマが会おうところでストップし、じゃんけんをして「優先権」(right of way)を決めるわけである。これは頭の上では可能だが、実際には採用できない方策だろう。血の気の多い人間のことから、これでは「こらぁ、止まれ!」、「おまえこそ止まれ!」と、けんかを始めるのがオチであろう。第2の、もっと実際的な方策は、横断道路に信号機を設置することである。そして、「青なら進行、赤なら停止」という約束を決めておくといよい。すると、常識のある人間ならば、約束を守るであろう。

ところがである。ビートたけしはさすが鋭い観察をする。「たしかに、ヒトがひとりひとり渡る場合にはそうなるう。しかしだ。ヒトがみんなで渡る場合には、状況が一変するよ。そうすりゃ力関係が逆転、譲るのはむしろクルマのほうだ。だから、赤信号みんなで渡れば怖くない!」

このようなわけで、みんなで道路を渡るケース(B)の利得行列を示せば、図1の下のチャートのようになるう。明らかに、左上のペアを除いて、残りの3つのペアは上のチャート(B)のときと同じである。だが、もしヒトがみんな同時に進み、クルマも進もうとする場合には、状況が激変するだろう。ここでは、ヒトのほうの力関係が上だから、当初進もうとしたクルマは早晚ブレーキを踏まざるをえないだろう。だから、ヒトは意気揚揚とクルマを待たせて、道路を悠々と横断できる。だから、その利得は15と高い。それには反して、進行するつもりが停止させられたクルマのほうは大損をする。多くのヒトがひっきりなしに横断する場合には、クルマは長時間ストップせざるを得ないだろう。この点を勘定に入れて、クルマの利得は-30と極めて低くなる。

道路横断ゲームがチャート(B)のようであれば、ナッシュ均衡は1つしかない。それは当然ながら、ヒトが進行し、クルマが停止する場合である。たとえ信号機を設置しても、うまく機能しないだろう。ヒトは青信号で渡り、赤信号

でもみんなで渡れば怖くないのである。

以上では、道路横断ゲームを立ち入って考察した。その結果分かったことは、プレイヤーの数が利得行列の数値に影響を与える可能性がある、という点である。ゲーム理論の応用をする際、この点を肝に銘じておく必要がある。しかも、人々の数だけではない。プレイする周囲の環境や制度が異なれば、各プレイヤーの利得が異なるかもしれない。人々は「真空状態」の中でプレイしているのではないのだ。人は生まれた環境の影響を受け、社会制度や秩序の変化とともに変化する。したがって、現在のゲーム理論は、まだまだ不完全である。生臭い人間関係を分析するためには、ゲーム理論を乗り越える「生きた人間行動の科学」の樹立が必要であろう。

VI 生活経済学の目的と意義

本稿の目的は、伝統的な経済学の流れを鳥瞰し、その中から厚生経済学の復権への道筋を見つけることである。しかも、単なる復権では面白くない。それに新味をつけた復権でなくてはならないだろう。私見によると、そのことは「生活経済学」(economics of human life)という新たな科学を通じて可能になるだろうと信じる。それで以下ではひとつの試論ながら、生活経済学の目的と課題を考えてみたいと思う。

VI-1 厚生経済学から生活経済学へ

以上において、アダム・スミス以降、現代に生きる経済学の流れを批判的に検討してきた。生活経済の視点から、生かすべきものは生かし、捨てるべきものは捨てる、というのが私の立場である。このような批判的検討から明らかになったことを要約すれば、次のごとくである。

①アダム・スミスによれば、経済学的主要目的は富の研究である。つまり、経済学とは第1に人々に生活資料を提供し、第2に公共サービスを提供することを通じて、生活状態を改善するための学問である。それが経済発展と社会進歩一般に深く関わっている。人々の富と生活を富ます点において、スミスの唱

導する自由放任システムのほうが、重商主義や重農主義のような優遇・制限システムより優れている。

②他方、スミスの経済学には、市場経済における価格決定のメカニズムを分析しようとする副次的目的がある。有名な「神の見えざる手」の主張は、市場メカニズムの最適性よりも、その運行可能性のほうに関係している。国家からの保護・奨励策を廃止し、各人による私利追及を自由にやらせても、各財・サービスの需給バランスが円滑に実現され、しかもベターに実現される。これは「人間業」ではなく、「神の仕業」ではないだろうか、とスミスは感じた。

③経済学の主たる目的を富の研究ととるか、それとも価格決定の研究ととるか——この相違がアダム・スミス以後の経済学の展開に決定的なインパクトを及ぼしてきた。200年以上に及ぶ長い歴史においてさまざまな学派が形成されたが、それらの学派を分類する方法の1つとして、富の研究をめざす「富学派」と、価格決定を中核とする「価格学派」とに大別する仕方がある。

④ワルラスは「価格学派」の代表選手である。ワルラスは完全競争と完全情報の仮定の上で、多数の財市場における価格の同時決定を分析する。これが現代経済学の主流の考え方に連なっていく。ところが、ワルラスは土地社会主義者であり、「純粋モデル」の構築に理想社会の夢が関係している側面を忘れてはならないだろう。

⑤これに対して、マーシャルは「富学派」の中心選手である。マーシャルは、純粋論理よりも経験主義を重視する。だから、抽象的な「経済人」よりも、生身の血の通った「あるがままの人間」の研究こそが、学者の研究テーマである。分析用具の点でも、マーシャルはワルラスと大きく違い、競争の不完全性の基礎の上に部分均衡分析を採用する。さらに、外部経済・不経済を視野に入れ、人間の組織のあり方にも言及する。

⑥ピグーは、マーシャルによる「人間の研究」をさらに推進し、厚生経済学を樹立した。ピグーによれば、精緻な経済分析は人間生活の改良の道具であり、人々を取り巻く貧乏・悲惨・不潔・不安・絶望などの害悪の除去のために使用

されねばならない。だが、当初の意図がかくも雄大なものであったにもかかわらず、ピグーは「経済厚生＝各個人の効用の総和＝国民分配分」という関係式が近似的に成立する世界だけに分析を狭くしてしまった。そして、不幸にも、このように限定されたピグーの分析が論理的欠陥を持っていたため、経済学者の関心が論理的整合性を整える方向へと偏ってしまった。

⑦ピグーの経済学に対する最大の攻撃の矢は、効用の個人間比較の妥当性に対して放たれた。その欠陥を回避しようとした「新厚生経済学」は、「パレート最適」の概念の上に樹立された。具体的には、各種の無差別曲線と変形曲線を用いて、「すべての競争均衡はパレート最適であり、またその逆も真である」という「基本定理」を樹立することに全力が注がれた。その結果、フローの配分の効率性の問題だけが取り扱われ、ストックの分配の問題が切り捨てられることになった。さらに、パレート最適の考え方は、ねたみ・うらみ・いじめなど、人間の根源的な感情を無視している。だが、「消費の外部効果」は至るところにあり、この事実をなおざりにする議論は、人間世界を感情なきロボットから成るとみるSFのような世界である。

⑧パレート最適の議論にはこのような致命的な難点があり、厚生経済学の展開は縮小過程に入ってしまった。そして、経済学者の興味は経済厚生より市場のワーキングのほうに向かい、ワルラス流の一般均衡の考え方を高度な数学モデルにまで昇華させる方向に傾いていった。それが一般均衡理論であり、完全競争・完全情報という理想経済の完全武装化が成功した。当時は米ソの冷戦時代であり、このような理想化が共産主義へ対抗手段としての意味をもった側面は否定できないだろう。

⑨現代では、一般均衡理論の限界を意識して、それを何とか乗り越えようとする動きがみられる。その1つ流れがリスクと情報の経済学であり、情報の不完全性・非対称性が経済活動に及ぼす効果が分析される。だが、そこにおいても、指針となるのは合理的な期待効用理論であり、リスクを前に恐れおののいたり、逆に挑戦してやろうというような「生身の人間」の姿がいまひとつ十分

にとらえられていない。そのうえ、それは確率計算ができると前提しているので、「予想外の出来事」に対して全くお手上げの状態である。

⑩現代のもう1つの流れはゲーム理論の新展開であり、少数の人間間の戦略的關係に分析の光が投射される。だが、ここでも、一般均衡理論の世界と同じく、基調をなす思想は個人主義である。ゲームのプレーヤーは、やはり合理性一本槍の経済人であって、生身で血気盛んな人間ではない。愛用されるナッシュ均衡は便利な概念だが、難点も否定できない。というのは、ナッシュ均衡の考え方は、自己防衛的な人間の姿をよく把握しているが、陽動的な行動や積極的な行動を十分掘みきれていないからである。さらに、ゲーム理論では、取り巻く環境や制度が逆に個人の行動を制約する、という事実が無視されている。

以上が、生活経済の観点から眺めた経済学の歴史の概要である。要するに、アダム・スミス以後の経済学は、ワルラス流の価格決定論と、マーシャル流の富・生活論の2つに大別される。前者で取り扱う人間は、最大化・最小化一辺倒の「経済人」であるのに対して、後者で問題とする人間は、感情を持ち生活の改善を願う「あるがままの人間」である。

大胆に言えば、現代の経済学の主流派は「ワルラス7割、マーシャル3割」の経済学である。生活経済学を構想するとき、このミックスの割合を逆転し、「マーシャル7割、ワルラス3割」でなければならないと思う。要するに、最近の経済学者は頭も心も凍てついてしまっていた。ここで再び、マーシャルの精神を生かして、「暖かい心と柔らかい頭」を持たなければ、経済学は現実からますます遊離してしまうであろう。

振り返れば、ピグーの厚生経済学はもともと大胆な構想であり、人々の貧困・悲惨・不潔・不安・絶望などの生活状態をいかに改善するかを意図していた。ところが、その理論的展開においては、問題が「経済厚生すなわちGNP」のように矮小化されてしまい、効用の個人間比較の迷路に入ってしまった。その結果、あたかもパレート最適を図ることが経済厚生最大化につながるのだ、という「過信」ないし「迷信」が生まれたようである。だが、このような奢り

や迷いから目覚める時期がそろそろ来ているのではないだろうか。

もちろん、昔の厚生経済学をそのまま復権させるのはよくない。それを現代風にアレンジし直して、新しい魂を入れなければならないだろう。そこにこそ、生活経済学の存在意義がある。「厚生経済学から生活経済学へ」——これが今日の経済学者が挑まねばならない課題なのである。²¹

VI-2 生活経済学の課題——7つのポイント

生活経済学を「現代に生きる厚生経済学」として体系化しようとする場合、いろいろなポイントを抑えておくことが必要である。上述のように、基本的考え方としては、経済学の「風の向き」をワルラスの方向からマーシャルの方向に変えなければならない。このことは、経済学を単なる価格論から豊かな生活論へと再構成することを意味する。

もっと具体的に述べると、次のような7つのポイントを肝に銘じておく必要があるだろう。

①まず、ハードとソフトの関係に注目したい。昔は、「財＝形のあるハードなもの」という簡単な考え方でよかった。だが、現代では、財やサービスの定義をできるだけ広くするのが実際に適っている。というのは、リスクや不確実性の世界では、リスク・安全・情報・流通・教育・保険・医療など各種のソフトが、市場の取引対象となるのだ。さらに、環境・共生・生態系などが、生活経済を豊かにする上での「キーワード」となるだろう。

②ミクロとマクロの相互作用を勘定に入れる必要がある。現代経済学の基調は、すべてのことをミクロの個人に還元するということである。だが、日本社会では、人々の「横並び意識」が強く、全体の「空気」や「雰囲気」で議論の方向が決まることが珍しくない。この点で、上で詳論したように、「赤信号みんなで渡れば怖くない」というビートたけしの指摘は非常に鋭いのである。

21 最近において、伝統的な経済学の手法に対する反発の声がますます大きくなってきている。注目すべき新展開として、シューマッハ（1973）による「小さいは美しい」の考え方や、ポールディンク（1984）による「ヒューマン・ベターメントの経済学」の構想の2つを挙げておく。21世紀の初頭には、第2のマーシャル、第2のピグー、第2のケインズが輩出するであろうと期待している。

③フローとストックの相互作用も重要である。現代経済学では、変数と与件を完全に分離する考え方が支配的である。だが、バブルで一般物価が急騰すれば、食物・衣料などのフローの価格が変化するばかりでなく、土地・家屋などのストックの価格も激変するだろう。また、資産の不平等を不問にしたままで、ただ賃金格差のみを問題にしても、ゆたかな生活をめざす人々の心に訴える程度は小さいであろう。

④理想的なベストより、現実的なベターを目指そう。共産主義思想にしても、パレート最適の概念にしても、発想の根本は同じである。というのは、ともに理想的なベストの状態の実現を前提しているからである。だが、現実とは理想と違う。あまりにも、理想を追うと、理想社会をいたずらに美化したり、また、一方の理想が破れた反動として、他方の理想へ走ったりする。これからは、生活をゆたかにするために、さまざまなベターな方策を求めよう。

⑤スタティックだけでなく、ダイナミックな考察が是非必要である。静態的なパレート最適の考え方には、おのずから限界がある。環境や年金の問題を出すまでなく、世代間の公平性を強く念頭におく必要がある。

⑥合理性と非合理性は両立している。現代経済学では、各主体はギリギリの条件付き極大化を目指すとしている。だが、生身の人間は経済活動に従事するときでさえ、「まずまず」のところで満足することが多い。ケインズの「美人投票」が教えるように、投機活動は人間の精気と血気に深く結びついており、バブルがバブルを生む可能性があるのだ。他方、ギャンブルにはそれ自体の価値があり、「やるっきゃない」という企業家精神が市場経済のダイナミズムを支えている。

⑦風土と経済は互いに影響しあっている。現代の経済学のモデルでは、まるで真空状態の中で、ロボットとロボットが取引をしているような幻覚に陥っている。だが、あるがままの人間は常に国民性の影響を受けており、風土・文化・民族・歴史などの非経済的要因が人々の行動を強く制約している。そのことは、タテ社会とヨコ社会、柔構造と剛構造、横並び意識と独立意識などの比較

から明らかである。例えば、日本は保険大国であるが、その事実と保険思想との間のミスマッチがよく指摘されている。日本においては、保険と貯蓄が未分化であり、定額保険よりも養老保険が好まれる傾向がある。つまり、欧米社会と異なり、「掛け捨て嫌い」の保険思想が日本社会で定着している。²²

以上7つのポイントが、ゆたかな生活を考える科学、すなわち生活経済学を構築するために避けて通れない点である。もっと突っ込んだ議論については、稿をあらためて展開したいと思う。

VII おわりに——新しい経済科学への道

筑波大学にいと、外国からの留学生に接触する機会が多い。最近では、大陸中国からの留学生の数が年々増加している。この中国では、「社会主義市場経済」という世紀の大実験が行われつつある。それでは、社会主義体制の中に市場経済という「異質」なものをあえて導入しようとする理由は何であらうか。また、われわれ経済学者は留学生にどのようなアドバイスをすることが可能であらうか。

1つのアドバイスの仕方はこうである。「市場経済システムを是非導入しなさい。なにしろ、競争均衡はパレート最適であり、その逆も真であることが証明されているのですから」。だが、こういう硬直的な答え方で、留学生の多くは納得するであらうか。

もう1つの回答の仕方はこうである。「市場経済を採用すれば、社会の矛盾と搾取が復活します。共産主義という永遠の理想の旗をそう簡単に下ろすものではありません」。これもあまりにも教条主義的見解であって、もはや人々の共感を得にくいであらう。

われわれは、もっと素直になる必要がある。このことから、第3の道が生まれる。「人間がつくる社会はどれも完全ではありません。ベストを望まずベタ

22 筆者はかねてより、「土の香りのする経済学」を唱導している（酒井泰弘（1991）を見よ）。日本人と保険文化の関係については、保険文化研究会報告書（1995）が意欲的な分析を展開している。

ーを望みましょう。生身の人間にとっては、市場経済のほうが計画経済よりゆたかな生活を保証してくれるでしょう」。実際のところ、留学生が日本経済の勉強から一番期待するのは、多様で自由で安心できる生活の保証なのである。

30年近く前、私がアメリカの土を踏んだとき一番印象に残ったのは、ロサンゼルス郊外のディズニールランドを訪れたときだった。「ああ、アメリカの生活は何と豊かで夢のある生活なのだろう!」と、私は眼を丸くした。それから、ロチェスターで夢の留学生生活を過ごすことになった頃、私は夏目隆先生の車に便乗して奥様とご一緒に、週末には近くのスーパー、そして時には、はるか遠くナイアガラの滝まで連れて行っていただいた。ドライブの際には常に、「アメリカの生活水準はやはり凄いなあ。日本も早く追いつかなければ」と痛感したものだ。

生活経済学の体系化には、幾多の困難が待ち受けているかもしれない。だが、私はいまなお「万年青年」の気持ちでいる。親しい研究仲間とともに、新しい経済科学構想の実現に向けて、微力を尽くしていきたい。

思えば、ベルリンの壁が崩壊し、社会主義大国ソ連が消滅し、東西冷戦は一応終結した。市場経済をパレート最適の概念で「美化」する必要はないのだ。それより、「市場経済対市場経済」の問題のほうが重要であり、ある1つのシステムが他のシステムよりベターとはどういうことかが検討されねばならない。この点で、「ゆたかな生活」を研究する経済科学——生活経済学——の体系化に向けて、全力を傾ける必要があるだろう。

参 考 文 献

朝日譲治『生活資本と社会整備』多賀出版、1994年。

Arrow, K. J. and F. H. Hahn, *General Competitive Analysis*, North-Holland, 1971. (福岡正夫・川又邦雄訳『一般均衡分析』岩波書店、1976年。)

Barone, E., "Il ministero della produzione nello stato collettivista," *Giornale degli Economisti*, 1908, 268-293; translated in F. A. Hayek, ed. *Collectivist Economic Planning*, London, 1935.

Boulding, K. E., *The Economics of Human Betterment*, Macmillan, 1984.
(蛭峨座晴夫監訳『ヒューマン・ベターメントの経済学——生活の質へのアプローチ』)

勁草書房, 1989年。

Cournot, A. A., *Resherches sur les principes mathématique de la théorie des richesses*, 1838. (中山伊知郎訳『富の理論の数学的原理に関する研究』岩波書店, 1936年。)

Engels, F., *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*, 1883. (大内兵衛訳『空想から科学へ——社会主義の発展』岩波書店, 1946年。)

Galbraith, J. K., *The Affluent Society*, Houghton Mifflin, 1958. (鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』TBSブリタニカ, 1980年。)

Galbraith, J. K., *The Age of Uncertainty*, Houghton Mifflin, 1977. (都留重人監訳『不確実性の時代』TBSブリタニカ, 1978年。)

Graaff, J. de V., *Theoretical Welfare Economics*, Cambridge University Press, 1957.

原司郎「生活経済学の課題——生活大国の実現に向けて」生活経済学会体系化委員会報告, 1995年3月31日。

Hicks, J. R., *The Crisis in Keynesian Economics*, Basic Blackwell, 1974. (早坂忠訳『ケインズ経済学の危機』ダイヤモンド社, 1977年。)

保険文化研究会報告書『生命保険・その文化史的研究』生命保険文化センター, 1995年。

Jevons, W. S., *The Theory of Political Economy*, London, 1871. (小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳, 寺尾琢磨改訳『経済学の理論』日本経済評論社, 1981年。)

加藤寛孝編『自由社会と倫理』成文堂, 1995年。

Keynes, J. M., *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan, 1936. (塩野谷祐一訳『雇用・利子・貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 1983年。)

Keynes, J. M., "A. Marshall," *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. X, *Essays in Biography*, London and Basingstoke, 1972. 大野忠男訳『人物評伝』東洋経済新報社, 1980年。)

熊谷尚夫『厚生経済学の基礎理論』東洋経済新報社, 1948年。

黒岩洋昌『厚生経済理論』創文社, 1970年。

Marshall, A., *Principles of Economics*, Macmillan, 1890. (馬場啓之助訳『経済学原理』全4巻, 東洋経済新報社, 1965。)

Marx, K. and F. Engels, *Manifest der Kommunistischen Partei*, 1848. (大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波書店, 1951年。)

森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波書店, 1994年。

夏目隆「パロネ計画経済モデルの再検討」北野熊喜男博士古稀記念論文集『経済と社会の基礎分析』三和書房, 1979, 191-206ページ。

日本経済新聞社編『経済学の先駆者たち——アダム・スミスからマーシャルまで』日本経済新聞社, 1995年。

大石泰彦「発刊の辞」『生活経済学会会報』第1巻, 1986年3月, 1-3。

岡 潔『日本のこころ』講談社, 1971年。

Pareto, V., *Manuale di economia politica*, 1906.

- Pigou, A. C., *The Economics of Welfare*, Macmillan, 1920. (気賀健三ほか訳『厚生経済学』4分冊, 東洋経済新報社, 1953—55年。)
- Pigou, A. C. *Socialism and Capitalism*, Macmillan, 1937. (北野熊喜男訳『社会主義対資本主義』改訳, 東洋経済新報社, 1966年。)
- Quirk, J. and R. Saposnik, *Introduction to General Equilibrium Theory and Welfare Economics*, McGraw-Hill, 1968. (田村泰夫・樺本功訳『一般均衡理論と厚生経済学』東洋経済新報社, 1971年。)
- Robbins, L., *The Essence and Significance of Economics*, (辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957年。)
- Robbins, L., "Interpersonal Comparisons of Utility," *Economic Journal*, Vol. 48, 1938, 635-641.
- Robinson, Joan, *Economic Heresies*, Basic Books, 1971. (宇澤弘文訳『異端の経済学』岩波書店, 1976年。)
- Russell, B., *The Conquest of Happiness*, Unwin, 1930.
- 酒井泰弘『不確実性の経済学』有斐閣, 1982年。
- 酒井泰弘『寡占と情報の理論』東洋経済新報社, 1990年。
- 酒井泰弘『リスクと情報: 新しい経済学』勁草書房, 1991年。
- 酒井泰弘『リスクと保険の経済分析』『国民経済雑誌』第170巻, 第3号, 1994年, 39—68ページ。
- 酒井泰弘『市場経済と計画経済——情報と流通の役割』『国際協力論集』第1巻第2号, 1994年, 71—89ページ。
- 酒井泰弘『安全のコスト』『予防時報』181号, 1995年4月, 48—53ページ。
- 酒井泰弘『はじめての経済学』有斐閣, 1995年。
- Samuelson, P. A., *Economics: An Introductory Analysis*, McGraw-Hill, 1948. (都留重人訳『経済学』上下, 岩波書店, 1966年。)
- Schumacher, E. F., *Small is Beautiful: Economics as if People Mattered*, London, Blond & Briggs, 1973.
- Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2 volumes, 1776. (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』5分冊, 1959—66年。)
- 鈴木光男『新ゲーム理論』勁草書房, 1994年。
- 宇澤弘文『経済学の考え方』岩波書店, 1989年。
- 宇澤弘文『経済学の新しいパラダイム』『経済セミナー』1995年1月, 35—50。
- Veblen, T., *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, 1899. (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店, 1961年。)
- Von Neumann, J. and O. Morgenstern, *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton University Press, 1944. (銀林浩・橋本和美・宮本敏雄訳『ゲーム理論と経済行動』5冊, 東京図書, 1972—73年。)
- Walras, L., *Éléments d'économie politique pure, ou Théorie de la richesse sociale*,

Lausanne & Paris, 1874. (久武雅夫訳『純粹経済学要論』岩波書店, 1983年。)

Winiecki, J., *The Distorted World of Soviet-Type Economies*, Routledge, 1988.

(福田 亘・家本博一・永合位行訳『ソ連経済がなぜ破綻したのか——東欧に見るその「歪んだ世界」』多賀出版, 1991年。)